

アルケイアー記録・情報・歴史―
第一四号 二〇一九年十一月 四九―八一頁
南山アーカイブズ

上智大学史資料室所蔵AV資料の
デジタル化と研究・教育での活用

堅田 智子

流通科学大学商学部

The AV Collection of Sophia University Archives:
A Way to Digitize and Use of Research and Education

University of Marketing and Distribution Science
Faculty of Commerce

KATADA Satoko

Archeia: Documents, Information and History
No.14 November, 2019 pp.49-81
Nanzan Archives

はじめに

一 AV資料のデジタル化の経緯

- (一) 教職協働・職員協働イノベーション研究とは
- (二) 教職協働・職員協働イノベーション研究の目的と研究方法
- (三) 研究成果

- ① AV資料の所蔵状況の確認（二〇一六年度～二〇一七年度）
- ② 資料の新規目録作成（二〇一六年度～二〇一七年度）
- ③ 評価・選別・デジタル化の実施
- ④ メタデータの作成

二 デジタル化されたAV資料の研究・教育での活用

- (一) 研究での活用事例
- (二) 教育での活用事例

- ① 上智大学の場合
- ② 獨協大学の場合
- ③ 他大学の場合

おわりに

上智大学史資料室所蔵AV資料のデジタル化と研究・教育での活用

堅田 智子

はじめに

上智大学史に関連する資料の収集・整理・保存を目的とする上智大学史資料室（以下、史資料室）は現在、上智大学中央図書館の九階にある。上智大学は、二〇一三（平成二五）年に創立一〇〇周年を迎えたが、大学の歴史に比して、史資料室の歴史は浅いこともあり、史資料室の存在は、残念ながら学内でもあまり知られていないように思われる。

史資料室の原点には、一九八〇年から一九九三年まで順次刊行された、『上智大学史資料集』の編纂にあたった、史資料集編纂委員会の活動があった^{〔1〕}。一九七七（昭和五二）年三月、上智学院第五代理事長柳瀬睦男（一九二二―二〇〇八）のもと、第二代理事長を務め、文学部教育学科教授であったドイツ人イエズス会士クラウス・ルーメル（Klaus Luhmer, 1916-2011）を委員長に、史資料集編纂委員会が発足した。史資料集編纂委員会は、文字どおり、『上智大学史資料集』の編纂・刊行を目的に資料収集を開始し、これが史資料室の活動につながったと考えられている

ものの、史資料室の正確な発足時期は、長年、不明であった。

しかし、筆者が上智大学で発生した学生運動に関する調査を進める過程で見つけた資料から、遅くとも一九六八年一二月時点で、学生運動が激化する中、大学関連の資料を避難させるべく、大学からほど近い新宿区若葉に「資料室」が設置されていたことが判明した。こうした避難措置以前の「資料室」の実態は依然として不明であるが、いずれにせよ史資料集纂委員会の発足以前から、学内には現在の史資料室に類する組織は存在していたようである^③。

本稿では、二〇一六年度より開始された上智大学史資料室所蔵の映像資料と音声資料（以下、A V資料）のデジタル化の経緯やその現況について、その活動の基礎となった上智学院主催の教職協働・職員協働イノベーション研究にふれながら紹介する。さらに、デジタル化されたA V資料の研究・教育への活用事例や展望についても紹介していく。

一 A V資料のデジタル化の経緯

（一）教職協働・職員協働イノベーション研究とは

現在、史資料室では、資料の所蔵状況に関する調査と並行して、デジタルデータ目録の作成が進められている。所蔵資料の総数は不明であるが、数万点におよぶと思われる。

史資料室に所蔵されているA V資料のデジタル化は、二〇一六年度から二〇一八年度まで計二回にわたり採択された教職協働・職員協働イノベーション研究の一環として開始された。教職協働・職員協働イノベーション研究と

は、上智大学の理念に基づき、学院行政や教育・研究体制の改善・改革にむけて、実現可能な研究・政策の提言を目的としている上智学院に所属する教員と職員、あるいは職員が所属部署の垣根を越えて協働し、グループで研究を推進していくものである。

二〇一七年二月、第七回（二〇一六年度～二〇一七年度）教職協働・職員協働イノベーション研究において、上智大学国際教養学部准教授スヴェン・サーラを研究代表者とした研究グループによる研究テーマ「大学関連映像・音声資料のデジタル化を通じたIRの基盤構築と人材育成」が採択された。七名からなる研究グループは、文学部史学科教員、総務局広報グループ職員、学術情報局総合メディアセンター職員、史資料室臨時職員から構成され、当時、上智大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程に在籍し、文学部史学科研究補助員（RA）を務めていた筆者も参加した。このほか、上智大学史研究を進めている上智大学国際教養学部名誉教授、東京大学文学部准教授もオブザーバーとして研究に携わった^③。

（二）教職協働・職員協働イノベーション研究の目的と研究方法

教職協働・職員協働イノベーション研究による「大学関連映像・音声資料のデジタル化を通じたIRの基盤構築と人材育成」は、上智大学のIR基盤形成の一翼を担うべく、上智大学に関連するAV資料のデジタル化を行ない、その過程と成果を教育に積極的に生かし、「記録を残す」「記憶を伝える」人材育成と意識作りへとつなげることを主たる目的とした。なお、IR（Investor Relations）とは、企業が株主や投資家にむけて企業の経営・財務状況などを発信・広報することだが、本研究では、在校生、卒業生、受験生などへの大学に関する情報発信・広報を意味する。

現在、上智大学に限らず、学術・研究機関では、一般的に文書や映像を作成する際、はじめからデジタル化される。とくに学術研究や教育成果は、公開を原則としていることから、上智大学の場合、「上智大学学術情報リポジトリ」を運用し、ここに学内で刊行された学術紀要などが、PDFファイルにて掲載されている。^①

一方で、おおむね一九九〇年代以前の文書や映像については、学籍簿など一部をのぞき、デジタル化がなされていない。こうした未デジタル化の資料は、上智大学にとって貴重な文化的資産であるにもかかわらず、そもそもこれらに歴史的・学術的価値があることが認識されていないため、その存在さえも忘れ去られ、研究や教育にほとんど活用されることはなかった。

こうした問題意識をふまえ、本研究では、①総務局広報グループが管轄する史資料室、総合メディアセンターが管轄するテレビセンターが所蔵するAV資料の状況を確認、②これらAV資料を分類し、目録を作成、③デジタル化にふさわしいAV資料を評価・選別し、デジタル化を実施、④デジタル化したAV資料を研究・教育に活用、という四つの個別研究を段階的に進めていった。

(三) 研究成果

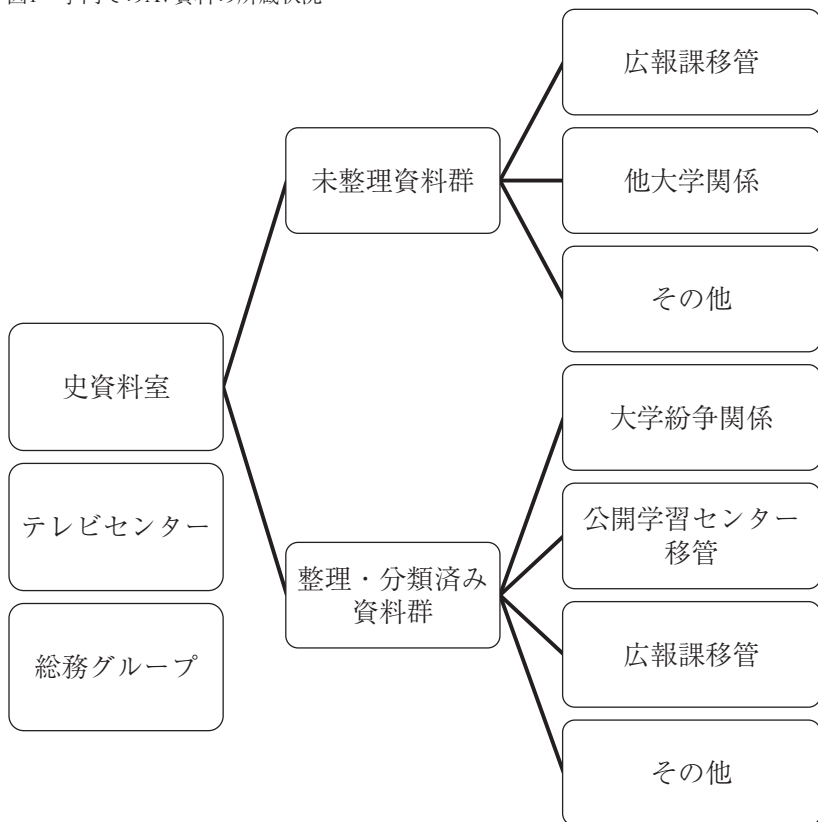
① AV資料の所蔵状況の確認（二〇一六年度～二〇一七年度）

教職協働・職員協働イノベーション研究を進めるにあたり、大学に関連するAV資料は、おおむね史資料室とテレビセンターに所蔵されていると想定していた。しかし、調査を進める中で、入学式や学位授与式、地域懇談会など大学が主催する式典にかかわるAV資料は、総務グループが所蔵していると判明したため、調査・研究対象を拡大した^②。なお、図書館にも大学に関連するAV資料が所蔵されているが、所蔵状況が明確であり、上智大学図書館

の運営するオンライン蔵書目録（OPAC）にて検索が可能であるため、本研究の調査対象から除外した^⑥。また、一部の講義や講演会、オープンキャンパスでの体験授業の映像は、上智大学Open Course Ware^⑦にて、大学を紹介する動画はYouTubeの公式チャンネルにて閲覧可能だが、いずれも映像作成当初から、デジタル化がなされている映像資料であるため、本研究の調査対象から除外した^⑧。

これらAV資料の所蔵状況は、図1、記録媒体の状況および資料点数は表一のと

図1 学内でのAV資料の所蔵状況



（上智学院人事局人材開発グループ編『学校法人上智学院 第7回（2016～17年度）教職協働・職員協働イノベーション研究 報告書』（上智学院、2017年）をもとに、筆者作成）

表1 AV資料の記録媒体の状況および資料点数

所蔵先	分類	移管前の所蔵先	記録媒体の種別	資料点数
史資料室	未整理資料群	広報課移管	オーブンリール、VHS、カセットテープ、ミニDV、CD、DVD	397
		他大学関係	VHS、DVD	99
		不明	ベータマックス、VHS	587
		その他	カセットテープ	25
	整理資料群	大学紛争関係【86L】	カセットテープ	55
		公開学習センター関係【92A】	カセットテープ	271
		広報課移管【92B】	VHS、カセットテープ、オーブンリール、レコード	256
テレビセンター	—	その他【AV】	VHS	317
		不明	HDD	228
		—	カセットテープ、MD、DVD	105
総務グループ	—	—		2340
合計				

(上智学院人事局人材開発グループ編『学校法人上智学院 第7回(2016～17年度)教職協働・職員協働イノベーション研究 報告書』(上智学院、2017年)をもとに、筆者作成)

おりである。すでにデジタル化され、MP4やMP3などのデータによりパソコンに保存されているものをのぞき、映像資料であれば、八ミリフィルム、一六ミリフィルム、ベータマックス、VHS、小型ビデオカメラ用ミニDV、CD、DVD、音声資料であれば、オープンリール、カセットテープ、CD、MDというように、記録媒体も多種多様であることが分かった。

② 資料の新規目録作成（二〇一六年度～二〇一七年度）

前項で見たように、本研究で調査対象としたAV資料は、史資料室、テレビセンター、総務グループの計三箇所に所蔵されている計二三四〇点である。このうち、すでに目録が作成されていたのは、史資料室所蔵の整理資料群計六〇七点であった。したがって、本研究では、目録が作成されていない計一七三三点について、新たに目録を作成することとした。その際、将来的に学内で目録を統一し、一括して検索できるようになることを想定し、史資料室が現在、運用するExcelデータを用いた「資料表題目録」の項目にしたがい、①所蔵機関を付した仮番号（資料番号）^③、②資料点数、③表題、④資料作成年月日、⑤概要・備考（制作者、主催者など）、⑥資料形態（記録媒体）、⑦劣化の有無など資料状態、⑧メモ（移管情報など）を記載した。

こうした目録作成は、記録媒体に添付されているラベル情報を基本とし、史資料室の業務の一環として、史資料室所属の職員が実施した。また、本研究が人材育成も目的としていることから、上智大学大学院文学研究科史学専攻に所属する院生二名も作業に加わった。

③ 評価・選別・デジタル化の実施

目録作成後に、研究メンバーがそれぞれの専門分野にしたがい、本研究で調査対象としたA V資料全二三四〇点について、デジタル化し、永久保存にふさわしいか否か、次の七つの基準にしたがい、歴史的・学術的価値の有無を評価した。

- A) 記録媒体が古く、デジタル化をしなければ劣化を防げないもの
- B) 周年記念関係のもの
- C) 比較的年代の古い入学式や学位授与式関係のもの
- D) 比較的年代の古い学生生活関係のもの
- E) 上智大学と関わりの深い人物に関係するもの
- F) 上智大学キャンパス内の竣工関係のもの
- G) その他(記録媒体にラベルがないもの)

本研究では、調査対象としたA V資料すべてのデジタル化は困難であるため、今後のデジタル化の指標となる計四三点を選び、デジタル化した(表二一、二二)。なお、デジタル化にあたっては、劣化の度合いが高いオープンリールやカセットテープ、学内に再生機器のないベータマックスなどは、専門業者にデジタル化を委託した。また、比較的劣化の度合いが低いVHSは、テレビセンターにてデジタル化した。デジタル化の際には、汎用性を考慮し、映像資料はMP4、音声資料はMP3のファイルフォーマットを用い、DVDにデータを書き込んだ。

表2-1 第7回教職協働・職員協働イノベーション研究でデジタル化したAV資料の一例

音声資料／映像資料	資料番号	表題	記録媒体	歴史的・学術的 評価の基準
音声	86L-204	大学紛争関係	カセットテープ	A、D
	92B-2-81	ホイヴェルス師通夜ミサ	カセットテープ	A、D、E
	AV-3-2	上智大学前史 フォォォォォォ聞き取り	カセットテープ	A、E
	AV-3-3	ブシェーの日記	カセットテープ	A、E
	AV-3-4	上智大学の歴史 エッセイサバシナ神父	カセットテープ	A、E
	AV-3-27-1	大学問題についての座談会	カセットテープ	A、D
	AV-3-51	全共闘時代の学長交代の挨拶	カセットテープ	A、D、E
	AV-3-52	守屋先生退任感謝の会	カセットテープ	A、D、E
	史328	ソフイアブドキユメンタリーコメント	オーディオリール	A
	AV-1-3	アデナウアー西独首相	8ミリフィルム	A、D、E
動画	AV-1-9	上智短期大学創設時のフィルム	16ミリフィルム	A、C、D、E、F
	AV-2-56	ドイツへの上智大学紹介フィルム	VHS	A、E
	広報229	1999年度学部入学式	ミニDV	A、C、D

(上智学院人事局人材開発グループ編『学校法人上智学院 第7回(2016～17年度)教職協働・職員協働イノベーション研究 報告書』[上智学院、2017年]をもとに、筆者作成)

表2-2 第8回教職協働・職員協働イノベーション研究でデジタル化したAV資料の一例

音声資料／映像資料	資料番号	表題	記録媒体	歴史的・学術的 評価の基準
音声	AV-3-1	創立50周年記念式典式辞 大泉孝上智大学学長	カセットテープ	A、B、D、E
	AV-3-26	理工学部開学式	カセットテープ	A、D、F
	広報359	昭和45年度卒業式	オーブソニール	A、C、D
	広報381	スチューデントアワー 50周年記念番組	オーブソニール	A、B、D
	広報390	体育館竣工式	オーブソニール	A、D、F
	広報396	内容不詳②	オーブソニール	A、G
	AV-2-3	「上智大学五十年」日本語版	VHS	A、B、D、E
	AV-2-4	「上智大学五十年」英語版	VHS	A、B、D、E
	AV-2-27	ケルソ大司教ヨアヒム・ワイスナー枢機卿 上智大学名誉交友推載式	VHS	A、E
	AV2-57	1963年オリエンテーションキャンゾ	VHS	A、D
動画	AV-2-70	1987年オールソフイアンのつどい	VHS	A
	広報342	上南戦	オーブソニール	A、D

(上智学院人事局人材開発グループ編『学校法人上智学院 第7回 (2016～17年度) 教職協働・職員協働イノベーション研究 報告書』(上智学院、2017年)をもとに、筆者作成)

(一) で記したように、研究メンバーを構成した教員および筆者は、歴史学を専門としているため、AV資料の選別にあたり、各々の専門性を生かし、歴史的・学術的価値の有無を判断していった。しかし、目録作成を終えた段階で、文学部新聞学科が制作に明らかに関わったと思われる映像資料が五四二点、ふくまれていることが分かった。そこで、新聞学科教員二名に協力を仰いだところ、次の六つの基準にしたがい、歴史的・学術的価値の有無を評価した。

- A) おもに新聞学科の授業に活用可能なもの
- B) おもに新聞学科の授業に活用可能であり、映像としても価値があるもの
- C) カトリック関係のもの
- D) 映像として価値があるもの
- E) 内容を確認しながら、改めて選別を希望するもの
- F) 新聞学科としては不要かつ廃棄をしてもかまわないもの

そもそも、本研究で調査対象としたテレビセンターは、一九六六年四月に開設され、新聞学科がテレビ教育・研究に本格的に進出する契機となった施設である。当時、イエズス会日本管区長であったベドロ・アルペ (Pedro de Arrupe, 1907-1991) が、ジャーナリズムの中でテレビが重要な役割をはたすことを予期し、マスメディア研究を専門とした新聞学科非常勤講師ホセ・マリア・デベラ (Jose Maria de Vera, 1928-2019) に、テレビセンターの開設を命じたことが始まりである。¹⁰⁾ のちにデベラは、正式に新聞学科に着任し、テレビセンター所長や新聞学科長などを歴

任したが、本研究での新聞学科関連の映像資料の評価・選別に協力した新聞学科教員によれば、これらの資料の多くは、デベラにより制作・収集された可能性が高いという。

④ メタデータの作成

本研究により作成された目録は、あくまでも「資料表題目録」である。②で言及したように、将来的に学内で目録を統一し、一括して検索できるようになることを想定し、現在、史資料室が運用している「資料表題目録」の項目を踏襲した。史資料室に所蔵されている大半の資料は、文字史料（文献史料）であるため、「資料表題目録」に記載されている項目も、文字史料の整理を主眼に置いて設定されたものである。したがって、AV資料を検索する際、「資料表題目録」の形式では、収録分数、制作者、登場人物、場所、テーマなど、AV資料ならではの情報が不足する。そのため、研究メンバーで手分けし、デジタル化された「資料表題目録」よりもAV資料の情報管理や検索に適したメタデータの作成を行なった。

メタデータには、映像資料、音声資料問わず、①資料番号、②タイトル、③分数、④放送日、⑤撮影日、⑥ジャンル（記録映像かテレビ映像の録画か）、⑦カラーの有無／音声の有無／字幕の有無、⑧制作社、制作者、⑨出演者、⑩内容（何分頃）にどのような映像・音声の内容か、⑪注記（メタデータ作成者による分析結果、参考文献など）、⑫元形態（デジタル化前の記録媒体）、⑬所蔵、⑭参考画像を記載した。

二 デジタル化されたA V資料の研究・教育での活用

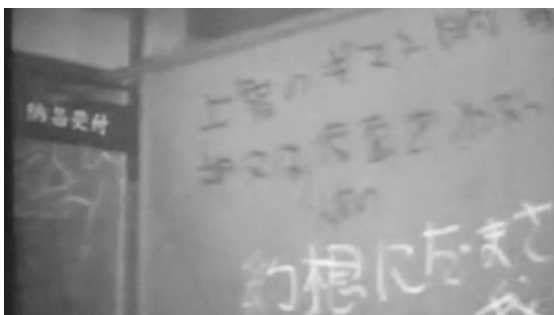
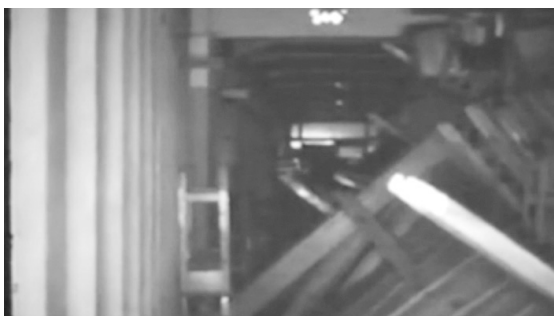
前章で詳述した経緯をたどり、教職協同・職員協同イノベーション研究におけるA V資料のデジタル化を実施した。本研究の目的の一つであったデジタル化されたA V資料の研究・教育への活用は、研究メンバーがそれぞれ担った。本稿では、筆者による活用事例を紹介する。

(一) 研究での活用事例

筆者は、二〇一五年末より大学史研究の一環として、上智大学における学生運動の展開について、史資料室に所蔵されている関連資料の調査を進めている。その成果として、上智大学史学会月例会（二〇一七年一〇月）、上智大学史ワークショップ（二〇一八年一〇月）、洋学史学会若手部会六月例会（二〇一九年六月）において、「上智学院第二代、第七代理事長クラス・ルーメルの見た学生運動——上智大学史資料室所蔵資料を用いた学生運動研究の可能性——」と題した口頭報告を行ない、同名論文を上智大学文学部史学科編『歴史家の調弦』（SUP上智大学出版）にて公表した^①。

当該論文では、上智大学における学生運動の全盛期である一九六八年から一九六九年までの間、渉外室主任として大学広報を担い、第二代、第七代上智学院理事長を歴任したドイツ人イエズス会士クラス・ルーメルに着目した。史資料室には、「K. ルーメル師寄贈文書」【寄贈一】や「大学紛争関係資料 ルーメル師、その他」【86M】のように、ルーメルの名を冠した資料が現存する。これらの資料群には、学内で配布・掲示されていた文書やビラ、パンフレットなど文字史料が大半を占めるが、学生運動当時の学内の様子を映した写真もふくまれている。また、

図2 「学園紛争による学内の被害状況のフィルム」【AV2-59】で映し出された校舎内の様子



（「学園紛争による学内の被害状況のフィルム」【AV2-59】より、筆者作成）

同時期に母国である西ドイツで発生した学生運動への関心を物語る、ケルンで配布されていた共産主義学生連盟の機関誌もある。そこで、ルーメルの収集・整理した学生運動に関する資料やルーメルの回想録といった文字史料を分析し、ルーメルが同時代的にどのように学生運動を見ていたか、また、どのように対処しようと考えていたのかを論究した。

なお、教職協働・職員協働イノベーション研究の一環としては、「大学紛争関係資料（警備委員会より移管）」【80】

のうち、教職員と学生間での討議や座談会、学長、副学長、理事長の講話などを収めた計六本のカセットテープ、学内の被害状況フィルム（【AV2-50】）計一本もデジタル化した⁽¹⁾。前者は、学生運動当時に活字化されていたが、カセットテープには、シユプレヒコールや怒号も収められている。また、後者は、バリケードが解除された後の校舎内を撮影したもののだが、割れた窓ガラスや殺伐とした教室の様子がそのまま記録されており、無音ながらも、写真以上に得られる情報は多い。以上のように、AV資料と文字史料を複合的かつ多角的に分析することにより、学生運動研究の深化に、新たな可能性を提示することができよう。

（二）教育での活用事例

①上智大学の場合

筆者は、二〇一八年度春学期において、上智大学文学部史学科の二年次必修科目「現代歴史学の課題」を担当した。講義全体のテーマは、筆者の専門とする日独関係史や両国が互いにいだいたイメージについてであった。第三回、第四回（二〇一八年五月九日、一六日）の講義では、上智大学史に見るドイツ人イエズス会士の動向やドイツとの関係を史資料室所蔵の古写真を交えながら説明した。また、第四回目の講義では、教職協働・職員協働イノベーション研究でデジタル化した「ドイツへの上智大学の紹介フィルム」（SOPHIA: Eine christliche Universität in Tokio）【AV2-56】を上映した。

「ドイツへの上智大学の紹介フィルム」は、ドイツでの募金活動のため、一九六一年に上智大学が地方国営放送局であった西ドイツ放送に依頼・制作した二九分の広報用動画である。全編ドイツ語であり、上智大学の創設から発展の歴史、学内やドイツ語の授業の様子、学生のインタビュー、ドイツ人イエズス会士で上智大学文学部英文学

図3 「ドイツへの上智大学の紹介フィルム」【AV2-56】での一場面



(「ドイツへの上智大学の紹介フィルム」【AV2-56】より、筆者作成)



(同)

科教授であったヨゼフ・ロゲンドルフ (Joseph Rogendorf, 1908-1982) による日本におけるキリスト教の役割の説
明などが収められている。

講義内では、時間の都合上、動画をすべて放映することは不可能であった。そこで、第七回教職協働・職員協働
イノベーション研究報告会 (二〇一八年一月二九日開催) で利用した編集版を放映した。この編集版は、ドイツ語
のナレーションを確認し、会話が途切れないように配慮し、筆者が作成したものであり、全二分である。講義では
まず、「ドイツへの上智大学の紹介フィルム」の由来を説明し、編集版を放映し、適宜、説明を加えた。ただし、
聞き取りやすく、平易なドイツ語の部分については、あえて説明を加えなかった。これは、第二外国語としてドイ
ツ語を履修する学生が、ドイツ語でそのまま理解できるよう工夫したためである。

講義終了時に、学生には課題として、大学史を学んだ感想、「ドイツへの上智大学の紹介フィルム」を鑑賞した
感想をリアクションペーパーに記入・提出させた。第四回目の講義には、受講者数八八名中七七名が出席し、リア
クションペーパーを提出したが、学生のおもなコメントは、以下のとおりである。

① 大学史について

- 現在と過去の上智大学の比較をしてみたい。
- 上智大学の歴史をより知ることができた。
- 大学史というものが面白い研究対象であると感じた。
- 文字で大学を知るよりも、見て大学を知ることができた。

② 「ドイツへの上智大学の紹介フィルム」について

i) 学生の様子

- 学生の中に外国人の先生が混ざって歩いており、今の上智と雰囲気が大きく変わらないと感じた。
- 女子学生が生き生きしているように見えた。
- 女子学生の服装がどれも同じに見えた。
- いつから女子学生が多くなったのか、気になった。
- 学生が下駄を履いていることに驚いた。

ii) 学内の様子

- 大学内にこんなにもドイツを感じるものが多かったことに驚いた。
- 暗い雰囲気に見えた。
- 学内の説明がわかりやすく、日常風景が見えた。
- 今の上智大学にも当時の面影が残っているように見えた。
- 構内の風景ばかりで単調だった。

iii) 授業の様子

- 授業をうける学生が退屈そうに見えた。
- 授業風景は、今と変わらないように見えた。

- 語学の講義がどのように行なわれていたのか気になる。

- ドイツ語の授業を日本人の先生が担当していることに驚いた（昔ならなおさら、ドイツ人の先生が担当していると思った）

iv) 学外の様子

- 〔筆者注…東京メトロ〕丸の内線付近の様子や真田堀の桜並木が変わっていないことに驚いた。

v) ドイツとの関係

- ナレーションがドイツ語であり、上智とドイツ関係が深かったことを実感した。

- ドイツ人はこのビデオを見て、どう思ったのか？

- ドイツ語以外の大学紹介ビデオは、作られたのか？日本語での日本向けのビデオは、いつから作られるようになったのか？

vi) その他

- キリスト教の要素を今より感じた。

- 一九六〇年代の古い大学の様子を見る機会がなかったので、貴重だと思った。

- 過去の様子と現在の様子を比較する形で利用してみては？

- 今のように満足度や就職率などのデータを出さず、素直に大学の姿を映し出している印象をうけた。

- ・ 字幕があるとういと思った。
- ・ 服装、通学方法、周囲の風景など文化に関わる情報がたくさんつまっているのです、映像を資料として活用できることを知った。
- ・ 当時、このビデオを見てどのように思ったのか気になる（あれでも「よくできたもの」といえるのか?）
- ・ 四回の講義を通じて、最も印象に残った。
- ・ ドイツ語を第二外国語で履修しているので、単語が聞き取れて嬉しかった。

以上のように、映像資料の活用方法について考えるコメントや、大学史に興味をもつ学生のコメントも多く見受けられ、筆者が講義で上智大学史を扱ったことに対して、さらに学びを深めたいという好意的な意見も多かった。しかし、上智大学では現在、大学史を学ぶいわゆる「上智学」のような講義は開講されておらず、大学史や大学の創設理念を体系的に学ぶ機会はない。全学共通必修科目である「キリスト教人間学」では、「他者のために、他者とともに」(Men and Women for Others, with Others) という理念の下、キリスト教ヒューマニズムを学ぶ。一部の講義では、大学史に類する内容も講じられているようだが、「上智学」に相当するものではない。

また、文学部史学科に在籍する学生を対象とした講義であったため、学生は日頃から、文字史料を目にする機会が多い。しかしながら、近代史を専門とする学生以外は、一次史料としてAV資料を用いること自体、皆無である。学生は、一年次の文学部史学科必修科目「歴史学入門」等で、歴史学における文字史料、非文字資料の効用について知識としては学ぶが、実際にAV資料を用いた歴史学研究を初めて目の当たりにした学生も多く、理論の実践の一例として、「ドイツへの上智大学の紹介フィルム」を見たようである。

こうした学生の反応は、おおむね筆者の予想どおりであった。むしろ、大学史を学ぶことを通じて、「なぜ、この大学で学ぶのか」という問いをみずから見いだした学生がいたことは、筆者にとって新たな発見であった。これは、上智大学のみならず、筆者が二〇一八年度春学期、二〇一九年度春学期と二度にわたり担当した、獨協大学の全学共通カリキュラム全学総合講座「獨協学」でも、同様の傾向が見られた。

② 獨協大学の場合

二〇一九年度春学期の「獨協学」のシラバスに掲げられている講義目的は、次のとおりである。

「獨協」という名詞は、「ドイツ（獨逸）学協会」の略称である。そしてその名詞をタイトルとするこの「獨協学」の授業は、学生諸君がそこで学ぶ獨協大学に冠せられたこの名詞が持つ多様な概念をトピックとしてとりあげ、日本、ドイツ、国際、外国語、近代、教育、学問、大学という相当抽象的な問題を、自分と大学について思考するための方法としてみようという目的の授業である。¹³⁾

「獨協学」は、輪講形式で展開される講義であり、筆者は、「草創期の獨逸学協会学校」をテーマに、隔年一回ずつ（二〇一八年六月四日、二〇一九年六月三日）講じた。三〇〇名以上の受講生の大半は一年生であった。

獨逸学協会学校に関する先行研究や筆者自身の研究をもとに、獨逸学協会学校の創立や現在の法学部に相当する専修科でのドイツ人法学者によるドイツ法の講義の実態、経営母体であり、獨逸学に通じるおもにドイツ留学経験者で構成された獨逸学協会について概説した。¹⁴⁾ また、獨逸学協会学校と同時代の教育機関の関わりとして、上智大学史資料室、獨協学園史資料センター所蔵資料の調査・分析により筆者が明らかにした、ドイツ人イエズス会士、

教員、学生に着目し、上智大学との人的交流、ドイツ語による専門的な講義の展開、ドイツ性を強く帯びた両校の共通性についてもふれた。上智大学を創立する準備段階において、獨逸学協会学校第六代校長長井長義（一八四五―一九二九）が、ヘルマン・ホフマン（Hermann Hoffmann, 1864-1937）ら上智大学草創期のドイツ人イエズス会士に対してアドバイスを行なっていたことから、「獨逸学協会学校がなければ、上智大学は存在しなかったかもしれない」と述べた。講義終了時には、上智大学での講義と同様に、学生に課題として、講義の感想や質問などをリアクションペーパーに記入・提出させた。

リアクションペーパーの中には、下記のように、「なぜ、この大学で学ぶのか」という問いをみずから見だし、その問いに対して自分なりの答えを考えた学生のコメントが多く見られた。

- 教科書に載っていない日独関係や獨逸学協会、獨逸学協会学校の歴史を学ぶことができたため、獨協大学で獨協学を受講したからこそ得られた知識があると感慨深くなった。
- 志望大学を選択する際、「表面的な獨協大学」しか見えていなかったが、獨協学を通じて、どんな理由で大学が作られたのか、学びの場の意味を知ることができ、自分の学びを振り返ることができた。
- 獨協大学の学生であることに誇りをもちたい。
- 獨逸学協会学校の歴史が深く、現在の獨協大学に通う価値を見出せたような気がするが、一方でドイツ語学科ではないので、ドイツらしさを感じる機会はないのが残念。

とくに注目すべきは、上智大学や他大学を第一志望としていたものの、不合格であったため、不本意ながら獨協

大学に進学した学生のコメントである。こうした学生にとっては、講義を通じて、獨協大学の歴史を学ぶことができ、獨協大学に通うことを誇らしく思うきっかけになったようである。また、獨協大学に進学したことにより、学歴コンプレックスを抱いていた学生からは、「肩の荷が下りた」、「あの上智大学と関係があったとは！誇らしく思う」といったコメントもあり、獨協大学で学ぶことに意義を見いだせたようである。上智大学での講義に比べ、獨協学は、獨協大学のルーツを学ぶという明確なコンセプトがあるため、講義内容をより身近なものとして捉えることができたであろう。

なお、獨協学そのものは、二〇〇三年度春学期に初めて開講された。「獨協学」を立ち上げ、初代コーディネータを務めた元獨協大学法学部教授堅田剛の作成した二〇〇三年度のシラバスから、二〇〇三年が獨逸学協会学校の創立一二〇年にあたること、翌年が獨協大学の創立四〇周年にあたることを意識した講義であったことがうかがえる。⁽¹⁵⁾ また、講義目標には、次のように記されている。

「獨協学」とは、主として新入生の皆さんに獨協（大学・学園）の過去・現在・未来を考えてもらう授業です。縁あって獨協の一員となった皆さんと私たちとで、獨逸学協会の歴史や獨協大学の現状を共有し、獨協の近未来像と一緒にデザインしてみたいと思います。「獨協学」は全学共通授業科目の一環として、学部・学科を問わず全学的に開かれています。さらに学生諸君だけではなく、教職員はもとより、社会にも世界にも開かれた自由な授業をめざします。この授業を「ニュー獨協」の発信基地として共に育ててください。獨協を「共育」しましょう。⁽¹⁶⁾

開講当初の「獨協学」は、大学史という「過去」を学ぶことを通じて、現在・未来の獨協大学を学生とともに考えていくことを目標としているが、どちらかといえば、前者に力点が置かれていた。二〇〇三年度の講義内容を見ると、獨協大学の現在・未来を考えていく講義は、全一三回のうち一回、最終回の「獨協大学の近未来を探る（ミニ・シンポジウム）」のみであった。しかし、当初の「獨協学」が、学生の現在・未来への思考を蔑ろにしていたわけではなく、シラバスには「受講生への希望」として、「教える・教えられるの関係を超えて、この授業を共に育てていきましょう。学生諸君の主體的な参加を強く望みます」として、参加型の授業であることが強調された。しかしながら、獨協学での筆者の講義を通じ、学生が獨協大学で学ぶことの意義を見出したような、「主體的な参加」までを想定していたとは考えにくい。

総じていえば、大学史を学ぶ講義は、学生にとって、大学への帰属意識や愛校心、さらには大学での学びの意義を見いだす契機となり、非常に有意義なものである。また、「獨協学」の場合、履修開始学年の制限を設けているわけではないが、全学共通カリキュラムとして位置づけられているため、一年生が履修しやすい。第一志望以外の大学に不本意ながら進学し、学びの意欲や大学への希望を失いつつある一年生に対して、大学史がもたらす効用は計りしれず、ともすれば、中途退学を予防する一策ともなり得るのかもしれない。したがって、大学史を学ぶ講義は、春学期に開講され、履修開始年次の制限を設けず、一年生の履修を積極的に促すことが理想であろう。

③ 他大学の場合

それでは、他大学での大学史に関連する講義の開講状況はどのようなものであろうか。法政大学では、自校教育科目として、二〇一一年度より、「法政学への招待」（二〇一九年度、「大学を知ろう〈法政学〉への招待」に改称）が開講されている。二〇一九年度のシラバスによれば、講義概要および目的は、以下のとおりである。

ようこそ法政大学へ！自分の学ぶ大学や学部がいつ、どのように作られたのか、そこにどんな想いや物語があったのか、知ってみたくはありませんか？

この授業では、一八八〇（明治一三）年の創立以来一四〇年になる本学の長い歴史を振り返るとともに、ほかの授業では触れない校歌の成り立ち、明治期からの海外との関わり、特徴ある研究の蓄積や図書館の個人文庫、学生文化の今昔、卒業生との活躍など、さまざまな角度から法政大学に迫ります。最後には学生たち自身で未来の法政大学を考え、総長に提言する機会も用意しています。授業を通じて、そうした歴史をもつ本学で学ぶ自らをみつめ、将来の目標やキャリアを考えてみましょう。⁽¹⁷⁾

また、明治大学の場合は、全学共通総合講座として、「明治大学講座——明治大学を知り、明治マスターになる——」があり、駿河台、和泉、中野キャンパスで春学期、秋学期あわせて、全九科目あり、大学史は、「明治大学の歴史Ⅰ」、「明治大学の歴史Ⅱ」が各三回ずつ開講されている。「明治大学の歴史Ⅰ」は大学史の概説、「明治大学の歴史Ⅱ」は詳論という位置づけであり、後者では、明治大学の前身である明治法律学校の卒業生であった弁護士山崎今朝弥（一八七七一—一九五四）⁽¹⁸⁾について取り上げている。二〇一九年度のシラバスによれば、「明治大学の歴史Ⅰ」の講義の概要は、以下のとおりである。

本講座では、講義ごとに異なる視点から、明治大学の歴史を考える。明治大学をよりよく深く理解することにより、その知的・人的等さまざまな「資源」を活用し、学生生活や卒業後の社会生活をより豊かにすることを目標とする。⁽¹⁹⁾

法政大学、明治大学はいずれも、講義での学びが学生生活、将来の目標や将来の社会生活に直結することを意識し、これをシラバスに明記している。一方で獨協大学の場合、こうした意図はシラバスには記載されていない。したがって、筆者の担当した講義回を通じ、学びの意義を主体的かつ能動的に考えようとした学生の姿勢を高く評価すべきである。

なお、獨協大学、法政大学、明治大学はいずれも、明治九大法律学校に数えられ、法曹養成を目的として、明治時代に創立された私立の法律学校を源流とする大学である。大学史研究も盛んであり、たとえば獨協大学で「獨協学」を立ち上げた堅田、明治大学で「明治大学の歴史Ⅱ」、「明治大学の歴史Ⅰ」の「明治大学の歴史・学部の歴史（明治・大正・昭和戦前）」を担当する法学部教授村上博は、いずれも法制史を専門とし、大学史についても著作を発表する、大学史研究の第一人者である^⑩。また、明治大学の場合、日々、大学史に関連する資料を整理・管理をおもな業務とする大学史資料センターの職員が輪講を担当していることも特徴である。

法政大学では、履修している学生の「先輩」にあたる卒業生が、大学生活と現在の職、活動について語る講義回も設定されている。現在の学びが将来、どのように展開していくか、学生が考える機会として有用であろうが、一方でこうした卒業生の担当する講義回があまりにも多いと、卒業生が思い出を語るばかりで、大学を知るといってもその目的から乖離してしまう危険もある。全一五回（あるいは一四回）の講義回数のうち、どのような割合で大学史と卒業生の担当回数を配分するのが適当か、検討の余地がある。

また同時に、生涯学習という観点でいえば、こうした大学史の講義は、在学生のみならず、卒業生をふくむ一般向けの公開講座として開講されることも想定すべきであろう。幅広い世代、キャリアパスをもつ受講生から、新たな反応が見られ、対外的なPRやIR活動へと活用できる可能性が高いのではないだろうか。

おわりに

本稿では、二〇一六年度から二〇一八年度まで、筆者が研究メンバーとして携わった上智学院教職協働・職員協働イノベーション研究「大学関連映像・音声資料のデジタル化を通じたＩＲの基盤構築と人材育成」をもとに、デジタル化された映像資料、音声資料の研究・教育への活用事例を紹介した。

本研究においては、恒久的な資料保存と利用を目的にＡＶ資料のデジタル化を目指した。しかし、たとえば映像資料のほとんどの記録媒体が、ハミリフィルム、一六ミリフィルム、ベータマックス、ＶＨＳ、小型ビデオカメラ用ミニＤＶ、ＣＤ、ＤＶＤと多様であったように、技術の発展はめまぐるしい。したがって、デジタル化したＡＶ資料も、数年後にはふたたび、新たな技術に基づいてデジタル化し直す必要に迫られるかもしれない。むしろ、時間が経つにつれ、現存するＡＶ資料の劣化が進み、再生することが困難になることを防ぐこそ急務であり、資料目録の作成を終え、資料の現存状況を把握するという、本研究での最大の目標を達成することはできた。

こうした成果の一方で、研究、教育のみならず、ＰＲ、ＩＲ活動など多方面で活用が期待されるＡＶ資料が上智大学内に数多く現存することについて、学内での認知度が極端に低いことも浮き彫りとなった。本研究では、上智大学史料室、総務グループが所蔵・管理するＡＶ資料を対象としていたが、学内にはこれ以外にも学部学科、研究機関、部署単位で独自にＡＶ資料が所蔵・管理されている可能性が非常に高い。ＡＶ資料のみならず、各機関で作成された資料が、各機関にどれほど所蔵されているか、そもそも包括的に検索するシステムもなく、状況の把握は困難を極める。また、本稿でも指摘したとおり、文書や映像の作成は、はじめからデジタル化されるのが一般化しており、資料の作成が簡便になった一方で、ＡＶ資料のように、再生機器がすでに処分されていたり、新たに入

手することが困難であったりするため、再生されることなく、歴史的・学術的価値を判断する以前に廃棄された資料があったであろうことは、容易に想像される。まずは、資料を作成・管理する側が、目の前にある資料とどのように向き合うか、とくに将来を見据えてどのように保存・管理していくべきなのか意識することから始めねばならないだろう。

本稿は、二〇一八年一月二一日に南山アーカイブズ講演会「上智大学における資料保存と研究・教育での活用」での筆者の口頭報告をもとに、大幅に加筆・修正した。

註

- (1) 上智大学史資料集編纂委員会編『上智大学史資料集』全六巻、上智学院、一九八〇―一九九三年。拙稿「第二代、第七代上智学院理事長クラウス・ルーメルの見た学生運動——上智大学史資料室所蔵資料を用いた学生運動研究の可能性——」上智大学文学部史学科編『歴史家の調弦』SUP上智大学出版、二〇一九年、一〇五頁。
- (2) 拙稿、一一五頁。
- (3) 当該教職協働・職員協働イノベーション研究の成果は、学内での報告会および報告書にて公表された（上智学院人事局人材開発グループ編『学校法人上智学院第七回（二〇一六―一七年度）教職協働・職員協働イノベーション研究報告書』上智学院、二〇一七年、一一五―一五八頁。上智学院人事局人材開発グループ編『学校法人上智学院第八回（二〇一七―一八年度）教職協働・職員協働イノベーション研究報告書』上智学院、二〇一八年、二五―四四頁）。
- (4) 上智大学学術情報リポジトリ <https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/>（二〇一九年六月三〇日閲覧）
- (5) ただし、総務グループが所蔵し、二五号館地下倉庫に保管さ

れているAV資料のみが対象である。

- (6) 上智大学図書館 OPAC システム http://lux.lib.sophia.ac.jp/opac/servelet/opac.OpacSearchServlet?ACTION_TYPE=newsearch&STYPE=2&SLV=1&SEND_SSL=off (二〇一九年六月三〇日閲覧)
 - (7) 上智大学 Open Course Ware <http://ocw.cc.sophia.ac.jp/> (二〇一九年六月三〇日閲覧)、上智大学 YouTube 公式チャンネル <https://www.youtube.com/channel/UCGGXtIDuJlUc9O6Ax5Myrzcg/featured> (二〇一九年六月三〇日閲覧)
 - (8) 仮番号は、以下のとおりである。史資料室所蔵(大学関係)：資料番号「史一」、史資料室所蔵(広報課移管)：資料番号「広報一」、史資料室所蔵(他大学関係)：資料番号「史他一」、総合メディアセンター(テレビセンター)所蔵：資料番号「総メ一」、総務グループ所蔵：資料番号「総一」
 - (9) デジタル化およびメタデータの作成により、学費問題に関する座談会の様子を記録したものである可能性が高いと判断した。
 - (10) Web で知る「SOPHIA」上智大学テレビセンター」(https://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/sophia_spirit/td24000000047f-att/td2400000007mftf.pdf) (二〇一九年六月三〇日閲覧)
 - (11) 拙稿、一〇一―一二二頁。
 - (12) 本資料のデジタル化は、第七回、第八回教職協働・職員協働イノベーション研究とは別に実施されたものの、メタデータ
- タの作成は、第八回教職協働・職員協働イノベーション研究の一環として行なわれ、成果として報告された。
- (13) 『二〇一九年度シラバス 全学共通授業科目』獨協大学、二〇一九年、二頁。
 - (14) 獨逸学協会および獨逸学協会学校研究について、以下参照のこと。拙稿「アレクサンダー・フォン・シーボルトと獨逸学協会学校」『獨協学園史資料センター研究年報』第五・六号、獨協学園史資料センター、二〇一四年、三一―三二頁。同「獨逸学協会学校の復興と和独会——大村仁太郎、玉井喜作、シーボルト兄妹の支援をめぐって——」『洋学』第二三号、洋学史学会、二〇一六年、六一―八七頁。同「上智大学史資料室、獨協学園史資料センター所蔵資料に見る上智大学の創設とドイツ人イエズス会士」『上智史学』第六三号、上智大学史学会、二〇一八年、一九―三五頁。堅田剛「獨逸学協会と明治法制」木鐸社、一九九九年。
 - (15) 二〇〇三年度全学共通授業科目全学総合講座「獨協学」春学期シラバス (http://www.dokkyo.ac.jp/kyounu/pdf/2003/zengaku_k.pdf) 八―九頁 (二〇一九年八月六日閲覧)
なお、二〇〇三年度は、春学期と秋学期にそれぞれ「獨協学」が開講されていた。
 - (16) 同、八頁。
 - (17) 二〇一九年度市ヶ谷リベラルアーツセンター開講科目「大

学を知ろう〈法政学〉への招待」ウェブシラバス (<https://>

- syllabus.hosei.ac.jp/web/preview.php?no_id=1911587&nendo=2019&gakubu_id=%E3%83%AA%E3%83%99%E3%83%A9%E3%83%AB%E3%82%A2%E3%83%BC%E3%83%84&gakubungu=AX&mode=pc）（二〇一九年八月六日閲覧）
- （18） 二〇一九年度「明治大学講座——明治大学を知り、明治マスタ―になろう——」ウェブシラバス（<https://www.meiji.ac.jp/edu/zenzaku/6t5h7p000000b763-at/6t5h7p000000r1212.pdf>）九六—一三頁（二〇一九年八月六日閲覧）
- （19） 同、一〇〇頁。
- （20） 堅田剛、前掲書。村上博編著『日本近代法学の揺籃と明治法律学校』日本経済評論社、二〇〇七年。